

ANU Religion Conference 2018 に参加・発表

堀内みどり

4月5日～7日にかけて開催されたオーストラリア国立大学での標記国際会議に参加・発表した。テーマは「Sacred Sites / Sacred Stories : Global Perspectives」(聖なる場所・聖なる物語：グローバルな知見)に参加・発表。

会議には、16カ国から約100名の参加者があり、17部会で49の発表が行われた。基調講演1では、Eileen Barker教授(London School of Economics、UK)が、巡礼を行う集団あるいは個人に働くちからによって、巡礼を11種類に分ける試みを行った。その上で「聖地」とはどういうものか、また「聖なる」とはどのようなものかについて再考した。

基調講演2では、Simon Haberle教授(Head of the School of Culture, History and Language, Australian National University)が、トロイ遺跡を題材に、聖なるところと世俗なところがどのように交錯するのかを考察。聖なる物/場所が、聖なる物/場所として在り続けるためには、そこを訪れる人の存在が不可欠であることを強調した。たとえ忘れられていた「遺跡」だとしても、それ意識する人が登場したり再評価したり再利用することによって、聖なる場所が復活することもあると指摘した。

堀内は、3日目の第15セッションで「天理教における聖地とは?」という観点から「ぢば」と「おぢばがえり」について紹介。天理教信者が聖地と言わず、ただ「ぢば」と言い、「ようこそおかえり」と帰参者を迎える気持ちは、神を「親神」と呼称し、教祖を「おやさま」と慕う信仰の現れであり、教祖在世当時から、人々は「おや」に逢うのが楽しみで「ぢば」に帰ってきていること、また、24時間参拝できることや「四方正面」という参拝場の構造自体が、天理教においては、いわゆる「聖地」を表象していることについても紹介した。

「天理教事典第三版刊行を祝う会」開催

4月24日、『天理教事典 第三版』の監修者および編集・出

版に関わった天理教道友社、天理時報社、おやさと研究所の関係者で出版記念の祝賀会を開き、無事に刊行にいたったことを喜び合った。(澤井治郎記)



第311回研究報告会(5月9日)

「遣唐使の見た開元の礼楽文化—日本人の求めた雅楽とは」

中 純子(国際学部・地域文化学科)

日本の雅楽は中国の雅楽とは違う。日本が取り入れたのは中国の宴饗音楽であることは、江戸時代からすでに認識されていた。ではなぜ日本は、中国の雅楽を取り入れなかったのだろうか。それについては、これまで多くの研究がなされてきた。例えば日本には御神楽があり中国の雅楽は不要だったとか、日本の天皇は中国の皇帝とは異なり、天地を祀ることが必要なかったため雅楽も要らなかった、などさまざまである。吉備真備たちが派遣された唐の開元期は、雅楽を掌る太常寺(宮廷音楽機関)も整備され、封禅の儀礼もなされ、中国初の皇帝誕生日の儀式も行われ、宮廷の礼楽文化が完成された時期であった。しかし、日本はその整備された中国の雅楽を真似ようとはしなかった。結局、遣唐使によって連れて来られた皇甫東朝・皇甫昇女や袁晋卿など、唐朝の音楽に精通する者により作り上げられたのは、天平勝宝四年(752)の東大寺大仏開眼供養会で披露された、日本および唐・林邑・高麗などの音楽が次々に奏される形の日本の雅楽であった。雅楽寮の設立(701)を発端にして、日本の雅楽がこのような形で整備されていった背景には、当時の対外関係に悩む日本が、日本流の華夷秩序を目に見える形で表すことを喫緊の要事としていたことがあると考えられる。

天理大学おやさと研究所

平成30年度公開教学講座

信仰に生きる
『逸話篇』に学ぶ(4)

場所：天理教道友社6階ホール

時間：午前10時～11時30分

- 4月25日(水) 高見宇造
56「ゆうべは御苦労やった」(終了)
- 5月25日(金) 岡田正彦
61「廊下の下を」
- 6月25日(月) 佐藤孝則
64「やんわり伸ばしたら」
- 9月25日(火) 森 洋明
62「これより東」
- 10月25日(木) 澤井治郎
59「まつり」
- 11月25日(日) 堀内みどり
52「琴を習いや」

*事前予約不要・来聴無料、お車でのご来場はご遠慮下さい。